
求める者。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

求める者。

【Nコード】

N36370

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

たった2歳。でもその差がもどかしい、
近付いても、すぐに離れてしまう。

ずっと近くにいた人だけど、

言われて気付いた。

知らなかった、気付いてなかった

1・目に見える距離、感じる距離（前書き）

初めて書いたものです。
全部で、5話あります。

1・目に見える距離、感じる距離

淡いピンクの花の中に、目にまぶしい緑が混じり始めた。入学式から1週間、学校へ向かう道にも少し慣れてきた。

「近いから」と、もう一つ重要な理由で、選んだ高校。

それこそ幼稚園から腐り縁の友人、

『安田 航』と、またしても同じ学校に行くべく、彼の家に向かう。通り道にあるため、昔から毎朝迎えに行っている。

「寄り道」ともいえるこの行為のために、早めに家を出るが、航には毎度待たされ、結局早く出たかいも無く、学校にはギリギリ。たまには早く出て来いっつーの。

面倒だし癪な気もするが、止められない理由もある。

いつものように、頭の中で愚痴を溢しつつ、チャイムを鳴らすと、バタバタと足音が近づき、

ガチャリと扉が開く。

「おはよ聡太、今日も時間きっかりね」

「おはよ葵姉、航まだ？」

「色気付いて、鏡の前で髪セットしてたから、まだかかるかも」

「げ、置いて行こうかな・・・」

「それがいいかもね、お先に」

屈託無く笑い、僕の前を通り過ぎる彼女に、僕は毎朝見惚れそうになる。

これがなければ、航なんかとっくに見限っている。

『安田 葵』2つ年上の、親友の姉だ。

昔は怖い存在だった。

「私の机触った!？」と怒り、「私のおやつ無いじゃない!」と殴られ、

「勝手に人のCD聞かないですよ」と、踏みつけられる。そんな理不尽な思い出が、・・・本当にたくさんある。

でも、彼女が中学に進んでから、雰囲気が変わった。

私服から制服に、短かった髪が伸び、凶悪だった顔に柔らかな笑み。一足先に大人になった・・・

たぶんそういう事なのだろう。

僕の中で彼女は、怖い親友の姉から、

・・・いわゆる憧れの人になった。

たかが2歳の差、

でも・・・僕には大きな壁に思えてならない。

2・知りたい事、知りたくない事

まったく聡太は偉いな、航なんかを毎日迎えに来てて。文句言いながらも

見捨てないでいてくれるし、本当に良い子なんだよね

今朝の事を思い出しながら、物思いに耽っていたらしい。

「葵、どしたのさつきからニヤニヤして、気持ち悪いよ?」

と、美晴に笑われてしまった。

・・・にやけてた?

あー恥ずかしい!

「なんかいい事でもあった? 聡太くんにも告白されたか?」

「はあ????」

・・・何故ここで、聡太の名前が出てくる!?

「まあいいや、ところで進路・・・」

「良くないっ!!」

思わず大声で叫んでしまった。

注目を集め、赤面しながらも、疑問を晴らそうとした。

「何で聡太の名前が出てくるの?」

「あれ? 気付いてない?」

「まずまず、頭の中が疑問符で埋まる。」

「・・・えーと、聡太に告られる事は、良い事なの?」

「あーらあら、天然さん? 葵、聡太くんの話してる時楽しそうじゃない」

私は、楽しそうにしてるのか?

「その様子じゃ当然知らないだろうけど、彼の株上がってるよ」

「へ?」

「入試の成績かなり良かったらしいし、見た目も可愛らしいしさ、

冷めてるっつーか

ちよつと大人びた雰囲気あるじゃん？それで同級から年上まで、満
遍なく狙ってる子

いるらしいよ」

「・・・誰が？ 聡太が??？」

何それ?・・・っていうか何で動揺してるの、私。

「幼馴染って安心してると、誰かに持つてかれちゃうよ」

黙り込んだ私の様子に、満足げに笑うと、

「で、本題なんだけどさ、進路どうすんの？」

そういつていた気がするけど、自分の思考の中に入ってしまった私
には、さっぱり届かず、

授業に来た先生の声がかかるまで、ぐるぐると考えていた。

放課後、今朝の事はとりあえず置いておき、音楽室で頑張ってい
る吹奏楽部の友達の所に

邪魔しに行く事にした。

先生が来るまでの時間に、楽器を吹かせてもらうのが楽しくて、よ
く邪魔しに行く。

音が出たり出なかったり、友達とふざけあつて、結構至福の時間
である。

「あ、為井くんだ。」

誰かの声がした。

今年入部の1年生を中心に、空気がざわついた。

窓から校庭を見ると、確かに聡太の背中が見えた。
ついでに航と、彼女の朋ちゃんもいた。

もう帰るらしく、校門の方へ向かって歩いている。

この急に沸き立った空気に、正直驚いた。

・・・美晴が言った事は本当だったんだ。

「安田く練習は始めるから、部外者は出てけ」
ポンと丸めた楽譜で、頭を小突かれた。

ゆっくり首を巡らせ、慥然とした表情で顧問の先生を睨んでやった。

「お前、毎日のように、ここ遊びに来るくらいなら、入部すれば？」
もう何度も聞いた台詞を、また先生は口にする。

「それとこれとは別なんです。」
荷物を乱暴に抱え、

じゃ、また明日くと、友人達に手を振り音楽室を後にした。

吹奏楽部は毎年、野球部の県大会予選の応援に借り出される。
今年度も、既に練習を始めていた。

階段を下りながら、

「暑いのはご免なんですよ」と
と、ぼそっと一人呟いた。

他に用事もないし…帰ろう。

下駄箱の自分の靴の下。

ちよつと隠れるくらいの封筒が1枚置いてあった。

「何だ？」

興味本位と、面倒事を厭う気持ち半分で開けてみると、折りたたんだ便箋が1枚。

・・・えーと、読めないって。

ミミズがのたくったようななどは、こつという字の事を言うのだから。
小学生でも、もつときれいな字が書けるんじゃないの？ ってほど
酷い文字の羅列。

とりあえず、何が書いてあるのか分からない事には、手の打ちよう

もない。

テストの時、先生はどうしてるんだらう？

他人事ながら、先生達に同情しつつ、

とりあえず持って帰って、解読してみる事にした。

「ねーちゃん、何してんの？」

夜、リビングのソファで謎の怪文書とにらめっこをしていると、

風呂上りの航が、麦茶片手に声をかけてきた。

「これ。」

ピラッとその紙切れを渡した。

お手上げである。断片的に読める平仮名はあるが、ひん曲がった漢字は『字』と認めたくない。

滅びた文明の、文字の解読もこんな苦労だったんだらうな。疲労のせいか考えている事が

ひどいと、自分でも思うが、

止めない。

紙切れを眺めていた航が

「どうすんの、これ？ 西山隆志って3年だったよな？」

「はあ????」

・・・今日はよく驚く日だ。

「あんた読めるのこれ？」

「確かに汚い字だけど、・・・ねーちゃんは読めないのか？」

「まったたく、ぜんぜん！ 古代文字の解読ってくらい？」

航は、盛大にため息を一つつくと、読み上げはじめた。

+
- - - - -
- - - - -
+

安田 葵様

明日の放課後、2号棟の裏で待ってます。
来るまで待ってます。

西山 隆志

+ - - - - -
- - - - - +

「・・・だつてさ。」

「へーあんた、特技よそれ、何でそんな字読めるのよ?」

思わず、感心してしまった私に、あきれた表情を向ける航。

「それはいいから、どうするか考えてやれよ」

「えーつと、西山つて誰だっけ?」

残っていた麦茶を一気に飲み干すと、

付き合つてられないとばかりに、自室に戻りかけた航を呼び止める。

「航!・・・今日美晴が言つてただけど。・・・聡太つて、モ

テンの?」

「はあ? 突然何だよ?」

「いーから、質問に答えろ。」

私の気迫に負け、慚然としながらも口を開いた。

「あーんと、小5くらいから、キヤーキヤー騒がれるようになった
かな?」

そのくらいから成績もトップになりだして、俺みたく、バカな事
しなくなつて

・・・少し雰囲気変わったんだよな、まあ聡太は聡太だけどさ

もちろん、今も大人気だぞ、本当腹が立つほど。」

・・・へー、そうなんだ。

弟のような彼の、そんな変化に驚いた。

その夜、夢を見た。

学校に行く仕度を済ませた頃、玄関のチャイムが鳴る。
弾む心をおさえ、急いで靴を履き、玄関から出ると、
そこに思う姿は無く・・・ただ白い世界が広がっていた。

3 予想外な事実と、不可解な謎

毎朝の日課。

いつものように安田家のチャイムを鳴らすが、いつもの足音がしない。

不思議に思っていると、航が出てきた。

「毎朝、ご苦労さん」

「偉そうに・・・そう思ってたんなら、毎朝待たせんな。」

はっはっはと、悪びれた様子も無く笑う。

「っーか、笑い過ぎ。」

「いや、途中からねーちゃん的事思い出してさ。」

「はあ？ そういえば葵姉は？」

それがさ・・・と、航は昨夜の話 시작했다。

「放課後に2号棟裏？・・・ベタだな。」

「お前もよく呼ばれてんだろ？ 為井くん、好きです！..!」

「気持ち悪い。」

「うらやましいよな〜」

何となく無邪気な表情と、能天気な物言いに腹が立った。

真摯な思いを断る作業のどこが楽しい？

あんなに面倒なものは無いぞ？

「じゃあ、朋ちゃんにその事を伝えておくよ。」

「はあっ？ 何で？」

「誰かに告白されたいんだろ？」

「波風立てるような事すんな。」

ああ、本気で慌てている。

まあ朋ちゃんなら、「じゃあ私がもう1回!」とか言って、サプーイズな告白を

企てるかもしれないけど。

航は愛されてるな〜なんて思ったが、そんな事を言ってるような優しい気分では無いので、焦った航をそのままに、少し早足で歩き出した。

昼休み。

売店で買ったサンドイッチと豆乳、そして読みかけの本を持って、屋上に上がる。

少し裏にまわった所が指定席。

程よく日陰で、風が吹き抜ける場所で、何より人が少ないのが気に入っている。

今日も、静かな一人の時間を満喫しようとした時、よく知ってる声があった。

「おーいたいた、聡太くん発見！」

「あれ？ 朋ちゃん一人？」

「そつ、用事があるからつて航は撒いて来たの。」

撒く？・・・やっぱり振り回されてるな。

彼女は、『石川 朋花』中学の時から、航の彼女だ。

予想の上に行く事をやってのける、見てて飽きない子だ。

あくまでも見ている分には、だ。

直接被害に遭っているはずの航は、毎回楽しそうで、少々理解に苦しむ。

「で、用事つて僕に？」

「当然。」

と、満足げににんまりと笑った。

「聡太くんさあ、何が不満なの？」

唐突だった。

不満？

「だって、今日は朝からいつもに増して意地悪じゃん？」

「意地悪？」

「そう、航に対する突込みが情け容赦無い。」

「そんなに酷かったか？」

「身に覚えの無い抗議だな、航が泣きでもしたか？」

「ははは、まさか。航は打たれ強いから、もっと酷くても全然平気だよ。」

話の軸がずれている。

意地悪と言ってたはずだが、もっと酷くて平気って、彼女の台詞とは思えない。

「ひょっとして恋の悩み？」

何故そうなる？

目を輝かせ楽しそうな表情で、正面に座り込んだ。

「何を根拠に、そんな話しになるんだ？」

なんとなく、居心地の悪さを感じ、少し視線をそらせて言い返した。

「おや？ 凶星？」

そうなのか？

こちらを構う事無く、朋花は続ける。

「だって、勉強なんかじゃ悩む事なさそうだし、教室でも一線画してるとこは

あるけどそれなりだし。」

それなりって何だ？

「そだ、知らないだろうけど、最初は私も聡太くん狙ってたんだよ。」

「はっ？」

「でもさ、ずっと遠く見てるって言うか、ずっと誰かを見てるよね、だから

いくら頑張っても無駄だなんて思ってさ、3日くらいで止めちゃった。」

「……って航は？」

「いいの、面白いから航は別格。・・・とにかく、悩むな少年。」
「同年だろ？」

「いーの、いーの。」
そして、ふざけた態度から一転、真面目な顔で正面から見据えられた。

「うじうじしないで、いい加減動け。」

「・・・。。。」
気迫に負けた・・・気がする。

しかし、それも一瞬の事で、再びにやりと笑い。

「駄目でも大丈夫。聡太くん目当ての子は、た〜っくさんいるんだから。」

「・・・おい、そのどこが大丈夫なんだ？ つーか人としてどうなんだ？」

「さあ〜？」

ひとしきり笑った後、朋花は

「言いたい事は行ったから、もう戻るね〜」
と、去って行った。

結局、サプライズの告白を受けたのは僕だった。

・・・言いたい事が、
思わず、ため息が出た。

放課後、朋花の言葉に背中を押された・・・からかどうなのか、気になって仕方がないのは
本当なので、ついつい2号棟の裏まで来てしまった。

そこにはもう、葵姉が居て・・・腕組みで、仁王立ち？
ほどなく、二人の男子生徒が近づいてきた。

おいおい、付き添い有りつて、どこの女子だ？

一人の男が前に出て、何か言っている。

すると、葵姉は右手で額を押さえ、話を途中で止めた？

今度は男を指差し、「・・・考古学者なんかじゃないから・・・」
遠過ぎて、殆ど何言ってるのかわからないけど、

本当に、何の話だ？

その後も、何か一方的に言ってるみたいだが、そのうち耐えられなくなつたのか

男が逃げた。

あれは、どうやら泣いている？

それを、付き添いの男が慌てて追いかける。

・・・一体何を言っただ葵姉？

心配してたのが馬鹿らしくなつて、思わず吹き出した。

「安心したかい、聡太くん？」

「み、美晴さん！？ いつの間に現れたんですか？」

背後の声の主は、こちらを見る事無く、前を向いたまま宣言した。

「私は神出鬼没が信条なの。」

葵姉の友達だから、昔から知ってるけど、未だに分からない人だ。

「面白い物が見れて、満足満足。だがしかし、言い過ぎかな・・・
鬼と呼ばれても仕方ないな。」

・・・本当に、一体何言つたの？

「って、何言つてたか聞こえたんですか？」

美晴さんは、ふと興味を覚えた顔でこちらを向く。

「知りたい？」

「はいっ。」

間髪入れずに答えたが、

「結果も良かったんだけどね、・・・もったいないから、秘密。」

本当に、分かんねー！！

「もったいないって何ですか？」

イライラしながら聞くと、

「パズルのピースは、他のじゃ駄目なんだよ、決まった形でないと嵌まらないんだよ。」

意味不明な事を言った。

4・見つからないものと、見つけたもの

「葵ちゃん、さすがにあれは酷すぎない？」

・・・何が？

「西山くん、泣いてたよ。一緒に来た友人に慰められてる姿は、哀れだったよ、いや無様？」

「ちよつと、また見てたの？」

「あまりのシヨックで、受験に失敗しかねないかもね。」

「ち、ちよつと美晴？」

「あ、そうだ。今回は聡太くんもいたのだよ？」

観察されていた事より、遥かに衝撃を受ける言葉を聞いた。

聡太？ 聡太がどうして？

「何で？」

「さあ？」

含み笑いで、見つめられた。

しかし、私が考え込んで黙っていると、ふいにつまらなそうな顔になった。

「あゝ、何だ本当に分からないのか・・・」

ドキツツとした。

期待した答えは、正解なのかな・・・

「本格的に受験始まるまでに片付けなよ？ じゃないと、失敗するのは葵かもよ？」

「・・・縁起でもない事、言わないでよ。」

「ほう、そう言うからには、進路は決めたのかい？」

「・・・決めてない。」

何がしたいんだろう？

今まで。何となくきてしまった。

本気になってした事なんかあったかな？

いつも遊びに行く吹奏楽部だって、何度誘われても乗り気になれなかったし、

現在に満足してたとか、享樂的に生きてきた気もないけど、未来も見えてなかった。

向き合う時が来たって事よね……。

この間見た、真っ白な夢……

私の漠然とした不安？

先を見ていない、私の未来？

どっちにしても、碌なものじゃないな……

そんな事を考えながら歩いてると、段差に気がつかなかった。

当然の如く、踏み外す。

驚き過ぎて、悲鳴は上がらなかった。

「……つくつ、あつはははは、何処の間抜けだよ……私は。」

しつかりと尻餅をついた後、あまりの情けなさに、笑えてきた。

「葵姉、大丈夫？」

「っ！？」

座り込んだままで、声の主を求め振り返る。

すぐ後ろに、右手を出した不自然な体勢で固まっている、聡太がいた。

「……ごめん、ちょっと間に合わなかった。」

うわっ、見られた……恥ずかしい。

……って、ん？

何か違和感を覚えた。

「ねえ、何がごめんなの？」

助けてと頼んだ覚えもないし、助けられる義理も無い。

ただ私の不注意で転んだだけだ。

「んー、運が良ければ助けられたかなって。」

「運？」

それは、どういう事なの？

「そんな感じで良いんじゃないの？ 目の前で知ってる人がこけそうだったら、

思わず動いちゃうでしょ？」

うーん、そういうものかな・・・

それは、ごめんの答えになっていないような気がするけど？

「今回は、運が悪くて助けられませんでした。・・・って事の、ごめんかな？」

運が悪くて・・・誰の運なのかな？

「ところで、足大丈夫？ 立てる？」

聡太の出した手につかまり、立とうとしたが、結構痛い。

「痛い？ 捻挫かな？」

痛そうな顔をしたのだろう、気遣わしげな声でした。

くすぐったい気分になる。

小さい時から知っている、弟の友達。

ずっと弟と仲が良いから、もう一人の弟くらいに思ってたはずなのに、

・・・何か違う。

「とりあえず、保健室行こうか？」

そう言っつて、聡太は前にしゃがんだ。

「おんぶ？ それ恥ずかしくない？」

「でも、歩けないんでしょ？」

「・・・うん。」

「お姫様だっこするには、僕の腕力足りないから、おんぶで我慢し

て。」

「ぶっ、正直だね。」

「そりゃ、15歳の小僧だよ？ 鍛えてるわけでもないし、でも無理して

落つことすほどガキでもないし、分相応ってやつ？」

なんか、冷静な判断してるのね、

いつまでもバカな、弟との差を感じてまじまじと見つめてしまった。

「で、痛いんでしょう？ 早く保健室行こうよ。」

「・・・あ、うん。」

おんぶされて、

・・・いや、ここで会って、話をして、

思ってた以上に大きくなっていた聡太に、かなりドキドキした。

5・僕、そして大切な人

転んだ葵姉を拾ってから、益々ギクシャクしているような気がする。絶対に、避けられている。

・・・僕、何かしたか？

朝もまともに顔会わせないし、学校でもあまり見かけない。

このよくわからない状況に、だんだん耐えられなくなってきた。何となく、胃も痛いような気がする。

それでも、少しでも姿が見られたら、少しでも声が聞けたら、そんな事を考えてしまう僕は、かなり重症なのかもしれない。

「おにいちゃん、暗い。」

「理佐・・・いきなり暗いって、酷くないか、それ？」

理佐はため息をついて、続けた。

「暗いものは、暗いの。家の中で雨降りだしそうだから、外に行くか悩むの止めてくれない？」

そういって、携帯をいじりはじめた。

・・・カワイク無い、こいつ。

そう思いながらも、素直に従って外に出かけた。

いや、言いなりになった訳じゃない、気分転換だ。

外に出ると、日が暮れかかった。

・・・俗に言う逢魔が刻ってやつか。

西の空は、必要以上の赤と、紫から紺に見事なグラデーションを成している。

思わず良い物が見れたと、喜びかけるが、玄関先で突っ立って眺めてるだけなのも虚しい。これでは、本当に追い出されただけだ。それに、この空はすぐに墨色に染まる。とりあえず、近くのコンビニに向かった。

外からよく見える雑誌売り場の前に、見知った姿があった。まだ家に帰ってないらしく、制服姿で立ち読みをしている。近付いても気付かないので、声をかけた。

「お客さん、立ち読はちよっと。」

「おうっ!？ 聡太か、驚かすな!」

何をそんなに読み耽っているのかと、手元を見ると1冊の雑誌しかも、どちらかといえば、女性向けのものだ。

「占い?」

「そっ、気にならなねーか?」

気にならないわけじゃないが、気にしない。

結果が良くても悪くても、一々踊らされるのは嫌だ。

「別に。そんなに読み込むんなら、買ったらどうだ?」

すると無言で、雑誌の裏を示した。

「840円だな。」

「気にはなるが、出すには惜しい、よって立ち読み。You understand?」

「はいはい。せいぜい頑張ってください。」

アップルティーのソーダを買い、店を出ようとしたら、航が追いかけてきた。

「待て待て、俺も行く。」

「占いはもういいのか?」

「立ち読みだけじゃ、ないんだぜ。」

と、オレンジジュースの入った袋をかざした。

店を出て、ブラブラと歩く。

まだ帰る気になれないので、公園の方に足を向けた。

当然のように、航は横に並ぶ。

側に港があり、風向きによっては、潮の香りがする。

立ち木で普通の船は見えないが、汽笛の音が響き、馬鹿でかい豪華客船なら

ここからでも見える。

昔はよく遊んだが、今日は久しぶりに来た。

外灯の下のベンチを陣取り、ペットボトルの蓋を開ける。

炭酸特有の、プシュツという小気味良い音が響く。

「・・・お前の買う物は、時々わかんねーな。うまいのか、それ？」

「知らん、今日初めて見た。気になるから買ってみた。」

一口、口をつけたが、これは、

「外れかな・・・。」

航は声を殺し、肩を揺らして笑っている。

「笑うなら、堂々と笑え、余計に気になる。で、お前は何でオレンジジュースなんだ？」

「えー、ビタミンの補給？ 果汁100%だし。」

「・・・そっか。」

その答えに脱力しつつ、本題に入る。

「で、何か用か？」

「ん？」

「立ち読み切り上げてまで、ついてきたじゃないか？」

「あー、まあ聞きたい事はある。」

少し真面目な顔をして、大声を出した。

「聡太！」

「・・・な、突然何だ？」

「・・・お前、ねーちゃんと喧嘩でもしてんのか？」
予想通り。

今、真面目な顔で話す事は、それくらいしかないよな・・・

「喧嘩なんかした覚えはない。」

「正直、ねーちゃんの機嫌が悪くて困ってたんだ。なんつーか、八つ当たり？」

・・・弟の宿命だろうな、それは。

同情の念を抱きながらも、困っているのはこちらと同じ。

「何故か、避けられてるみたいなんだが、僕には理由が分からない。」

「

「気付いてないだけで、何かしたんじゃないのか？」

「怒らせるような事、した覚えなんか無いよ。」

「まったく、仲直りしてくれよ？ 間にいるオレがきついんだ。」

・・・本当に、理由があるなら教えて欲しい。

昼休み、相変わらず答えの出ない問題について考えるため、図書館に向かった。

入ってすぐ、葵姉の姿が目に入った。

本棚に近い席で、頬杖をつき、何かの本を難しい顔して捲っている。機嫌が悪そうな気がするが、そんな事は構っていられない。

迷わずに近付く。

本に影が出来たせいか、葵姉はすぐに顔を上げた。
目が合い、一瞬の沈黙。

そして逃げ出そうとした彼女の手を捕まえた。

「何で逃げるの？」

「・・・えーっと、何でだろう？」

「何で避けてるの？ 僕何かした？」

「……………」

「理由が分からなくて、もうずっとイライラしてんだ、教えてよ・
・葵姉。」

今にも泣き出しそうな顔で、しばらく黙っていたが、一度目を閉じ
再び目を開けると、まっすぐ僕を見据えてこう言った。

「言いたい事、……全部整理してくるから、時間頂戴。」

「……葵姉？」

「私も、モヤモヤして嫌だったの……ああもう、私らしくない！

明日は土曜だから、港の公園で……そうね、10時？

一晩でまとめて来るから、覚悟してなさい！」

そう言い放つと、掴んでいた僕の手を振り払い、本を棚に戻して図
書館から出て行った。

……僕は、何の覚悟をすればいいんだ？

翌朝、仕度をして出かけようとする、妹に声をかけられた。

「あれ、何処行くの？」

「ちよつと出かける。」

「それ、質問に答えてないし……」

なんで、こいつはいつも携帯握り締めてんだ？

どうでもいい疑問を抱きつつ、適当に返すと、

「私も……友達と買い物行くんだけど、途中まで一緒に行かない
？」

「行かない。方向違うし、公園に行くだけだから。」

「へー、港のところ？ 気をつけてね。」

誘ってきたくせに、あっさりと送り出された。

何か複雑な気分だ。

公園に着くと、葵姉は既に来ていた。

腕を組んで目を閉じ、何かを考えているようだ。

「5分前に着くように来たのに、葵姉早いね。」

「え、も・・・もう来たの!？」

なんだか慌ててる？

「もう、まだ早いじゃない、何で来たのよ!？」

「何でって、呼ばれたから。」

そんな事で怒られてもな、待たせても悪いし、早く来たんだけど
?」

葵姉は顔を赤らめ、ばつが悪そうに黙り込んだ。

「で、何の覚悟をしたらいいのかわかんなかったんだけど、

・・・歯を食いしばって、しっかり立ってる・・・とか？」

「ぶつ、何それ、いつの時代よ？」

「あれ？ 僕怒られるのかと思ってたんだけど？」

「何で？」

「さあ、僕に思い当たるふしは無いんだけど。」

「・・・私、怒ってないし」

葵姉は、慚然として顔を背けた。

僕は少し安堵し、

「じゃあ、何で避けてたの？」

やっぱり分からない理由の正解を・・・彼女に促した。

「・・・恥ずかしかったの。」

消え入りそうな声が、耳に届いた。

「え、足踏み外したのそんなにショックだった？ 僕見ちゃいけない

いもの見ちゃった？」

「そつちじゃない!」

「じゃあ何!？」

いい加減僕も焦れてきて、声に陰しいものが混じった。

再び消え入りそうな声だった。

「・・・いつの間に、そんなに大きくなってんのよ。」
予想もしてない言葉に、僕は困惑した。

「は？ そりゃあ時間は過ぎてくもんだし、ずっとちっちゃいままって人は・・・」

「ああ、もう!」

僕の困惑からくる正論を、途中で切り、ズカズカと近付いてくる。

「って、やっぱり怒ってる?」

「怒ってない!!」

言葉とは裏腹な表情で、近付いて来る。

止まらない。

殴られる? と、思わず目を瞑ると、温かく柔らかいものに包まれた。

「葵姉?」

驚いて目を開けると、首に手を回して抱きつかれていた。

・・・やっぱり理由が分からない。

彼女の温かさ、柔らかさ、甘い香りに、益々混乱する。

思わず抱き返したくなる両手を堪え、聞いた。

「・・・えーと、質問して良いかな?」

「うん。」

彼女は少し頷いて答えた。耳に当たる髪の毛が、少しくすぐったい。

「・・・今、抱きついてるよね?」

「うん。」

返事は肯定だけ。

「・・・あのさ、僕ドキドキするんだけど?」

「・・・うん、私も。」

同意の意思を示す。

「・・・何で抱きついてるの？」
首に回された手に、力が入った。

「・・・ばか。」

「・・・えーと。」

やっぱり、明確な答えは返って来ない。

「・・・察してよ、ばか。」

同じくらいの身長に僕は、真横にある彼女の顔を窺い知る事は出来ない。

でも、きつと・・・

僕はゆっくりと彼女の背に手を回し、力を込めた。

「これで正解？」

「・・・うん。」

「ところで、さっきから『うん』とか、『バカ』とかしか言っていない気がするけど・・・

言いたい事、纏めて来たんじゃないの？」

僕は耳元で囁いてみた。

「・・・もう、意地悪ね。」

「そう？ さあどうぞ。」

とぼけて彼女を促す。

「・・・好き。多分ずっと前から。」

「うん、僕も。」

「ズルイ、」

思わず、肩から顔を離して講義した瞬間、キスをした。

唇が離れ、真っ赤になった彼女に、

「僕も、ずっと前か

5・僕、そして大切な人（後書き）

まずは、読んでいただきありがとうございます。

初めて書いたくせに、次への布石や、裏で動く人物、また進路が未解決だったり、色々あるんですが・・・この世界で、他のお話を進めようと思っております。必ずしも、この二人が主役ってわけではありませんが、

お付き合い頂ける方は、今後とも宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3637o/>

求める者。

2010年10月17日18時14分発行